

原 著

中山間地域におけるフィールドワークの取り組みの成果 (第1報)

大西 昭子^{1*}, 高藤 裕子¹, 野村 美紀¹, 坂本 結¹, 森本美佐子²

要約: 本研究の目的は、中山間地域におけるフィールドワークの取り組みによる学生の学びと地域や生活に対する捉え方の変化を明らかにすることである。対象者はA短期大学の学生18名とし、学びを記述したレポートからコードを抽出し、質的帰納的に分析した。その結果、学生の学びでは【住民がもつ力への信頼と協働の意識の強化】、【地域への愛着の芽生え】、【人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感】、【看護専門職者としての自覚と意識の高まり】等の10のカテゴリーが抽出された。また、地域や生活に対する捉え方の変化では、【生活の多様性への気づき】、【地域の概念の広がり】、【地域の本質に迫る力の獲得】等の7つのカテゴリーが抽出された。このことから、フィールドワークでの経験は、学生の地域や生活の捉え方の視点を広げ、住民主体の地域活動を支援するといった公衆衛生看護の視点に立って考える力につながったと考える。

キーワード: フィールドワーク, 学び, 公衆衛生看護, 保健師教育, 地域

はじめに

公衆衛生看護学は、対象となる住民の生活を捉え、地域に住む人々の生活の質(QOL)の向上を目指すことを目的としている。A短期大学の専攻科では、3年間の看護師養成課程で習得した看護の知識体系を基盤にして、さらに専攻科に進学して1年課程で公衆衛生看護学を専門的に学んでいる。看護師養成課程では、地域に出て、住民の生活に直接ふれたり、住民組織活動や保健活動を目の当たりにすることが少ないため、公衆衛生看護学で対象とする「地域のすべての人々の生活を捉える」ことが言葉では理解できても、実体験が伴わないことからイメージができていく現状があった。このことは、大須賀も「(学生は)生活体験が少ないうえ、地域を意識した経験がほとん

どなく、複雑多岐な要素により構成され多様な看護ニーズを包含する「地区」や「地域」という概念が理解できにくい¹⁾」と述べている。また、厚生労働省の平成23年看護教育の内容と方法に関する検討会報告書においても、「若い世代においては生活体験が乏しくなっている。そのため、看護師養成機関で学ぶ学生も全体的に生活体験が乏しく、教育を行う上では教員の丁寧な関わりが必要となっている。一方で、丁寧な関わりが学生の主体性や自立性を育ちにくくしている側面もあり、教員は葛藤を感じている²⁾」と述べられている。このような背景の中、様々な看護教育機関で、グループワークによる演習やプロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)、ポートフォリオ、フィールドワーク等の方法が導入され、学生が主体的に

¹高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻 *Email: aoonishi@kochi-gc.ac.jp

²高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻 非常勤講師

思考して学ぶことができるような実践がなされている。特に保健師教育においては、地域診断を学ぶ過程での取り組みが多くみられた^{3)~9)}。

さらに、平成25年には、地域における保健師の保健活動に関する指針¹⁰⁾が厚生労働省より示された。そこでは、個別課題から地域課題への視点及び活動の展開、地区活動に立脚した活動の強化や、地区担当制の推進など、積極的に地域に出向いて住民のニーズを明確にし、住民と協働して健康づくりを推進することが保健師の役割として述べられている。つまり、保健師には人々の生活の場である地域に出向き、住民とつながり協働して活動することがより一層求められている。このような保健活動を実践できる看護専門職者を養成するためには、まずは生活や地域の実情を具体的に理解できることが基礎的な力として不可欠である。そこで、専攻科の前期の授業にフィールドワークを導入し、実際に中山間地域に足を運び、住民活動への参加や地区踏査、住民へのインタビューを通して、体験から生活や看護の対象である地域を捉えるということを学ぶ機会が必要ではないかと考えた。そして、平成28年度を初年度とする本取り組みを実施し、内容や教育効果を評価して今後の方向性を検討することとした。

本研究により、保健師の教育課程におけるフィールドワークの取り組みの成果が明らかになることで、保健師教育の質の向上の一助となり、より専門性の高い看護専門職者の養成につながることを期待される。さらには保健師教育課程が多様化している中で、専攻科という1年課程における保健師教育の強みやメリットを明らかにすることにつながると考える。

研究目的

本研究は、A 短期大学専攻科において、公衆衛生看護学概論（または地域組織活動論）の授業として取り組んだフィールドワークについて、学生の学びと地域や生活に対する捉え方の変化を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、フィールドワークでの体験に基づく学生の学びと、地域や生活の捉え方の変化をありのままに捉えることが必要であるため、質的記述的研究デザインを用いて研究を行った。

2. 対象者

A 短期大学専攻科において公衆衛生看護学を学んだ学生18名のうち、研究の参加に同意が得られた者とした。

3. 用語の定義

本研究で用いる用語を以下のように定義した。

学生の学びとは、フィールドワークを経験することで得られた学びと、そこから学生にもたらされた思考の変化や獲得した力を含むものとした。また、捉え方の変化とは、地域や人々の生活といったイメージ化が難しい項目について、フィールドワークの体験を通して得られた、考え方や見方、把握の仕方に対する新しい気づきや視野の広がりのことである。

4. 授業の概要

1) フィールドワークの位置づけ

フィールドワークは公衆衛生看護学概論の授業の一環として位置づけ、15コマ分の8コマで実施した。

2) フィールドワークの目的

フィールドワークの目的として、以下の3点を掲げて実施した。

- (1) 地域のなかで人々の生活にふれ、リアリティを持って人々の生活の多様性を理解する。
- (2) 人々の集まりである地域の個性にふれ、地域を診る視点を養う。
- (3) 地域で暮らす人々とふれ合い、その思いを聞くことによって、住民主体の活動の実際を理解し、人々の健康的な生活を支援する「公衆衛生看護」がイメージできるようになる。

3) 授業の概要（表1参照）

(1) 事前学習：90分×2コマ

グループワークにて、地域と地域住民の生活を理解するための視点をそれぞれ話し合った。また、本授業に対する個人の目標を立て、学生自身が何

を得てくるのかという目的意識をもって現地に臨んだ。

（2）現地での学習：90分×4コマ（1泊2日）

- ① 住民主体の地域組織活動への参加体験，参加者へのインタビュー調査
- ② B町の概要及びB町の保健活動に関する講義
- ③ ワールドカフェによる関係機関等との交流学习
- ④ 地区踏査とプレゼンテーション，住民との交流

（3）事後学習：90分×2コマ

地区踏査の結果をまとめ、グループでプレゼンテーションを行った。さらに、2日間の学びをレポート課題とし、学生個々の理解度を評価した。

表1 授業の概要

回・時間数	形態	内容
第1回 (90分×2コマ)	グループワーク	・地域及び生活を診る視点 や現在の捉えを話し合う ・グループ及び個人の目標を設定する
第2回 (90分×2コマ)	フィールドワーク	・B町の概要及び保健事業に関する説明 (B町社会福祉協議会、 B町保健師) ・住民主体の地域活動への参加及び交流 ・ワールドカフェ
第3回 (90分×2コマ)	フィールドワーク	・地区踏査及びプレゼンテーション ・住民との交流
第4回 (90分×2コマ)	グループワーク	・地区踏査結果のまとめと健康課題の抽出 ・報告と学びの共有、評価

4) 事前の準備

C県B町をフィールドワークの実施場所として設定した。実施にあたっては、地元の社会福祉協議会と複数回の話し合いを行い、実施内容を協議しながら、関係機関の協力の基にフィールドワークを実施した。

今回、B町に設定した理由は、以下の2点である。1つ目は、高齢化が加速する中で、学生の

生活圏域から離れ、日常生活とは異なる中山間地域の生活にふれることで多様な生活の在り方を理解するためである。また、A短期大学周辺の比較的便利な市街地については別科目で地区踏査を経験するため、学生は比較して地域の在り様を知る機会となる。2つ目は、社会福祉協議会等の活動が活発に行われており、住民主体の地域組織活動の基盤が整っているからである。

5. データ収集方法

本研究では、フィールドワークに参加することで得た学びを記述したレポートより内容を抽出した。レポートの項目は、①フィールドワークを通じての学び、②地区組織活動が中山間地域で果たす役割、③フィールドワーク実施前後での地域や生活の捉え方の変化、④フィールドワークでの体験を基にして公衆衛生看護で重要だと感じたこと、の4点である。

6. データ分析方法

本研究に同意のあった学生18名から提出されたレポートの内容を質的帰納的に分析し、フィールドワークにおける学びの内容と、地域や生活の捉え方の変化が記述されている部分を抽出し、コード化した。抽出したデータはKJ法を活用して分析し、類似したコードをまとめカテゴリー化を行った。分析にあたっては、研究者全員で検討を重ねることにより、分析の信頼性と妥当性の確保に努めた。

7. 個人情報の保護

個人情報の取り扱いには十分配慮し、外部に漏れないように厳重に管理した。個人情報を保護するため、データは匿名化し、書類等は研究者が鍵のかかる棚で保管し、研究室で分析をすすめた。なお、研究者と研究対象者は教員と学生の関係であるが、この研究において開示すべき利益相反はない。

8. 倫理的配慮

本研究は、平成29年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した（承認番号 第28号）。対象者に対して、研究の目的及び方法、研究の参加に伴う負担や時間的制約の有無、

研究参加への任意性、プライバシーの保護と匿名性の保証、データの管理方法、途中辞退の権利の保証、研究に参加しないことによる不利益は生じないこと、研究成果の公表方法、個人情報の保護等について、書面を渡し口頭で説明した。そして、対象者から文書にて同意を得た上で研究を進めた。なお、本研究による研究対象者の心理的負担を防ぐために、研究参加への依頼とデータ分析は、当該科目の成績を提出した後に行った。

結果

1. 対象者の属性

対象者は、平均年齢が21歳で、性別は女性が17名で男性は1名であった。全員が看護師免許を有しているが、看護師としての臨床経験はなかった。

2. フィールドワークでの学生の学び（表2）

フィールドワークでの体験から得られた学生の学びを分析した。その結果、抽出された219のコードから、【地域の力と健康度を高める組織活動への理解】、【住民主体の活動の根底に住民のニーズがあることの理解】、【住民がもつ力への信頼と協働の意識の強化】、【人々がつながりあって支え合う地域の強さの認識】、【生活の安心を形づくる地域のつながりの認識】、【地域への愛着の芽生え】、【人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感】、【公衆衛生看護活動の専門性に基づいて考えを導き出す力の獲得】、【看護専門職者としての自覚と意識の高まり】、【自己の課題への気づきと体験からの成長】の10の категорияと32のサブcategoryが抽出された。その結果を表2に示す。以後、categoryは【 】、サブcategoryは《 》，コードを「斜体」で示す。

1) 地域の力と健康度を高める組織活動への理解

【地域の力と健康度を高める組織活動への理解】とは、地域の中での組織活動の位置づけや役割について、実際に見聞きすることで体験から理解し、その活動が地域の健康につながっていることに気づくことである。

このcategoryは、《地区組織の役割に対する理解の深まり》と《地区組織活動が地域の健康を底上げしていることへの気づき》、《地域の力を強めるための組織活動への理解の深まり》の3つのサブcategoryで構成されている。

《地区組織の役割に対する理解の深まり》は、以下のコードに代表された。

「地区組織活動は地域を知り、人々の要望や困りごと、介入すべき点を把握して行われている」

「組織やグループには、地域に住む人々を対象に住民の健康や生き方への望みを実現するための役割がある」

「(組織やグループは) 高齢者や障害のある人、生活が自立していない人など幅広い年代の人を対象にして活動している」

《地区組織活動が地域の健康を底上げしていることへの気づき》は、以下のコードに代表された。

「それぞれの組織が持つ強みや役割を生かして住民の身体的・精神的・社会的な健康をサポートしている」

「グループや組織は人々の生活を身体的にも精神的にも豊かにしていると感じた」

「グループや組織は地域の中で人々の健康や生きがいを作り出す役割を果たしていると思った」

《地域の力を強めるための組織活動への理解の深まり》は、以下のコードに代表された。

「組織には住民の力を引き出し、地域の力を強める役割があると考えた」

「グループや地区組織は多方面から地域を活性化する役割を果たしている」

「(グループや組織活動は) 組織同士、人同士のつながりができ、人そのものにアプローチでき、地域が活性化する」

2) 住民主体の活動の根底に住民のニーズがあることの理解

【住民主体の活動の根底に住民のニーズがあることの理解】とは、地域で展開されている様々な活動が、住民のニーズに基づいて実施されているため、常に住民の声を拾い、住民の思いに沿うこ

との重要性を実感することである。

このカテゴリーは、《住民を中心とした活動への理解の深まり》と《住民の思いを知ることが活動の基盤となることへの気づき》、《住民の生の声に耳を傾ける重要性の実感》の3つのサブカテゴリーで構成されている。

《住民を中心とした活動への理解の深まり》は、以下のコードに代表された。

「地域や住民が何を必要としているのかを情報収集、アセスメントし、地域全体や地域住民の持つ力を高め、支えることが重要である」

「グループや組織は一人ひとりが主体であり、B町にはなくてはならない基盤的な役割を担っていると思った」

「健康課題に対して、専門職種が率先して解決に取り組むのではなく、住民が主体となり健康づくりを行っていることが分かった」

《住民の思いを知ることが活動の基盤となることへの気づき》は、以下のコードに代表された。

「(住民の) 思いから実施されている取り組みにはどういったものがあるのかを学んだ」

「地区踏査の中で住民からその人の思いを聞くことに苦戦したが、公衆衛生看護活動で住民の思いを聴くことは必要不可欠である」

「住民の思いを聴くことで個人の思いを知ることとはもちろんだが、共通した思いを知ることでも、公衆衛生看護活動の指針となる」

《住民の生の声に耳を傾ける重要性の実感》は、以下のコードに代表された。

「高齢者だけでなく、様々な世代の住民の声を聴き、その人々のニーズや生活もイメージできるようになることが必要だと考えた」

「歩いて得る情報や見てわかることだけでなく、地域を知るにはそこに住む人の話を聴くことが大切だと思った」

「話を聴かないと実際の住民の思いは分からないと思った」

「実際に地域に出て、住んでいる人の話を聴くことの必要性を強く感じた」

3) 住民がもつ力への信頼と協働の意識の強化

【住民がもつ力への信頼と協働の意識の強化】

とは、地域の中で生き生きと活動している住民とふれ合うことで、住民自身の持つ力や強みに気づき、その力を生かして地域を良くするために協働する必要性を認識することである。

このカテゴリーは、《住みやすさを形づくる住民の力への確信》と《住民と専門職者が協働する重要性の認識》の2つのサブカテゴリーで構成されている。

《住みやすさを形づくる住民の力への確信》は、以下のコードに代表された。

「住民が各々の地域に対する思いと、地域のために活動する力を持っていることに気がついた」

「地域の方自身が、どうしたら住みやすい地域になるかを考えながら地域の中で活動しているということが分かった」

「住民の笑顔が活力になり町の魅力になることが分かった」

《住民と専門職者が協働する重要性の認識》は、以下のコードに代表された。

「問題の対策を立てたり実行したりする時は、専門職の意見だけでなく、住民の思いを取り入れ、一緒に考えてくことで地域の力をより引き出せると思った」

「住民同士の力を引き出すだけでなく、専門職と連携しながら両輪で活動を展開していくことが重要である」

「(住民と専門職) お互いが知識を共有し高め合えることで、地域の力を伸ばしていけるのではないかと感じた」

4) 人々がつながりあって支え合う地域の強さの認識

【人々がつながりあって支え合う地域の強さの認識】とは、住民主体の地域における活動を通して人々のつながりや生きがい生まれ、そのつながりの中の絆の深まりによって、地域に良い効果が広がることを認識することである。

このカテゴリーは、《人とのつながりが地域に

もたらす良い効果の受けとめ」，《地域や人とのつながりで生きがいをもたらされることの理解の深まり》，《グループや組織活動がもたらす生きがいの認識》，《支援する側、される側でなくお互いが元気の源となることへの実感》の4つのサブカテゴリーで構成されている。

《人とのつながりが地域にもたらす良い効果の受けとめ》は、以下のコードに代表された。

「住民同士のつながりをつくることでお互いを見守るネットワークができ、地域を良くしたいという気持ちを高めることにつながる」

「住民同士がつながりを持つからこそ、日常にお互いを気にかけていられることを学んだ」

「町民のお互い様の精神や思いやりの気持ちから、人のつながりの強さや信頼関係ができています」

《地域や人とのつながりで生きがいをもたらされることの理解の深まり》は、以下のコードに代表された。

「組織やグループは、住民の生活を整え、生きがいまで影響を及ぼす役割があると考えた」

「人と人とのつながりが地域の力になり楽しみや生きがいにつながることが分かった」

《グループや組織活動がもたらす生きがいの認識》は、以下のコードに代表された。

「自主活動ではボランティアも利用者も、活動が生きがいになっていることを学んだ」

「組織活動に参加する住民の生き生きしている姿を見て、活動が生きがいとして大きな役割を果たしていることを学んだ」

「ボランティア活動とそれに対する支援はその人個人の生きがいになることを学んだ」

《支援する側、される側でなくお互いが元気の源となることへの実感》は、以下のコードに代表された。

「ボランティアをすること、組織活動を利用することが人々の笑顔や元気の理由となっている」

「ボランティア自身がやりがいを感じ、(住民と)相互により影響をもたらしていると思った」

「グループの中でお世話される人、お世話する

人ではなく、双方それぞれの役割を持って活動を楽しんでいるように感じた」

5) 生活の安心を形づくる地域のつながりの認識

【生活の安心を形づくる地域のつながりの認識】

とは、地域で活動するボランティア自身も地域で生活する住民であるからこそ課題を共有できることに気づき、さらに地域で人とつながることによって、日々の生活に安心が生まれることを理解することである。

このカテゴリーは、《ボランティア活動と日常生活のつながりへの視点の広がり》、《生活の基盤となる「安心」の再認識》、《地域や人とつながる居場所づくりへの期待》の3つのサブカテゴリーで構成されている。

《ボランティア活動と日常生活のつながりへの視点の広がり》は、以下のコードに代表された。

「地域に必要なものがつくられ、日常の中でさらに地域に合わせて変化して、現在の地域に不可欠なものとなっていると考えた」

「ボランティアだからこそ、対象者にとって身近なためその方々の抱える問題が分かる」

「ボランティア活動とそれに対する支援は普段の日常生活に深く影響することを学んだ」

《生活の基盤となる「安心」の再認識》は、以下のコードに代表された。

「『安心』の基盤の上に健康でいられることや生きがいがあることが幸せへとつながっているということを学べた」

「グループや地区組織は、住民の手で町をよくしていく仕組みづくりを陰から支える『縁の下の方持ち』の役割を果たしていると思った」

「高齢者の社会参加は、生きがい、健康寿命の延伸、孤立死防止、住み慣れた地域で安心して生活を継続することにもつながっている」

《地域や人とつながる居場所づくりへの期待》

「住民が活躍でき集まれる場があることが住民のQOLにつながっていることがわかった」

「グループや組織は、地域のつながりをより強

くするためや互いの居場所づくりの役割を担っていると思った」

6) 地域への愛着の芽生え

【地域への愛着の芽生え】とは、地域住民の地域に対する愛情や思い入れ、地域を良くしたいという熱い思いにふれることで心を揺さぶられたり、自分自身の地域に対しても関心が高まって地域を思う気持ちが生まれたりすることである。

このカテゴリーは、《地域活動の根底にある地域への愛着に対する感銘》、《住民の地域への思い入れに対する感動》、《自分の地域や周囲の環境への関心の高まり》の3つのサブカテゴリーで構成されている。

《地域活動の根底にある地域への愛着に対する感銘》は、以下のコードに代表された。

「地域には地域のことをよく知っていて、よくしようとしている住民の存在があることに気づいた」

「自分たちの地域を良くしたいという思いからボランティア活動につながっていると思った」

「地域は生活を支えている1つの集団であって、生活するためには地域を愛し、守るという気持ちが必要だと感じた」

《住民の地域への思い入れに対する感動》は、以下のコードに代表された。

「自分が住んでいる地域が慣れて生活しやすいなど、地域への思い入れも多くあることを知った」

「住民とかかわることで、人々が地域を好きという気持ちが伝わってきて自身の価値観が広がるきっかけとなった」

「ただ暮らす場所としての地域ではなく、地域が好きという思いをもちたいと考えるようになった」

《自分の地域や周囲の環境への関心の高まり》は、以下のコードに代表された。

「フィールドワークによって、日頃の通学の際などでも地域の景色に関心を持つようになった」

「フィールドワークの体験で、自分が自分の地

域の住民についてほとんど知らず、会話の機会もないことに気がついた」

「フィールドワーク前は自分が住む地域の良さや支えてくれている人の存在を考えたことがなかった」

「自分が住む地域の地区組織に視点を置いて、広報誌や町中にあるチラシを意識して見るようになった」

「自分たちの生活が、普段は直接関わっていない多くのグループ、組織に支えられているのだとわかった」

7) 人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感

【人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感】とは、地域住民のお互いを思いやる気持ちや、外部から訪れた自分たちを快く受け入れてくれる温かさにもふれることで、地域で活動するやりがいを発見することである。

このカテゴリーは、《活動の継続を支える人々の熱い思いに対する敬意》、《住民と関わることで実感した人のあたたかさへの感謝》、《地域で活動する保健師のやりがいと魅力の発見》の3つのサブカテゴリーで構成されている。

《活動の継続を支える人々の熱い思いに対する敬意》は、以下のコードに代表された。

「地区組織の人が住民の悩みや問題、強みを生かすことを真剣に考えている、熱い思いが伝わってきた」

「対象に対する優しさと思いやる気持ちが重要であり、活動の継続や質の向上にもつながると考えた」

《住民と関わることで実感した人のあたたかさへの感謝》は、以下のコードに代表された。

「人と人とのつながりが深いことや優しい住民の方が多いことを知った」

「自分たちを温かく受け入れてもらい、人の温かさを実感できた」

《地域で活動する保健師のやりがいと魅力の発

見」は、以下のコードに代表された。

「疾患を患っている方のために働きたいとばかり思っていたが、健康な方と共に地域のために働くこともすごくやりがいがあり意味がある素敵な仕事だと思った」

「実際に地域を歩き、住民の方と話をし、自分が思っていた以上に保健師の仕事は喜びや楽しさを感じられる素晴らしいものだと思った」

8) 公衆衛生看護活動の専門性に基づいて考えを導き出す力の獲得

【公衆衛生看護活動の専門性に基づいて考えを導き出す力の獲得】とは、フィールドワークの経験を通して得た知識や情報、住民の声から地域の課題や強みを把握し、課題解決に向けた提案や実施の可能性を考える力を身につけることである。

このカテゴリーは、《地域の課題解決の方向性の提案》、《将来の地域の課題の予測に対する思考の広がり》、《実際に行う支援活動の難しさの実感》、《地域を知ることが活動の基盤となることの再認識》の4つのサブカテゴリーで構成されている。

《地域の課題解決の方向性の提案》は、以下のコードに代表された。

「地域全体の捉えと個人の思いを組み合わせ地域で活用できる資源を関係職種や住民と作り上げる必要がある」

「地域のソーシャルキャピタルを活用して人々が自ら健康づくりができるような支援を行うことが重要だと感じた」

「その地域の持つつながりが強いという特性を生かし、住民の力で健康を増進する活動が重要だと学んだ」

《将来の地域の課題の予測に対する思考の広がり》は、以下のコードに代表された。

「住民の話から、地域の集いに出て来られなくなった住民へのアプローチが必要だと考えた」

「ボランティアも高齢になっていく中で事業を継続していく難しさを感じた」

《実際に行う支援活動の難しさの実感》は、以下のコードに代表された。

「住民のニーズを満たすには根拠やヒト・モノ・金、システムが必要となり、現実的な難しさを実感した」

「公衆衛生看護の具体的な方法については実践が難しいと感じた」

《地域を知ることが活動の基盤となることの再認識》は、以下のコードに代表された。

「地域づくりや施策につなげていくためには『地域を知る』ことが重要だと感じた」

「地域を支援していくためには、地域のことを良く知ることが大切だと学んだ」

「地域の特徴や文化を理解することで、その地域に合った公衆衛生看護活動ができると思った」

9) 看護専門職者としての自覚と意識の高まり

【看護専門職者としての自覚と意識の高まり】とは、地域で暮らす人々の生活や地域を知ることを通して、保健師の役割や専門性とは何かを考え、看護専門職者として自身に求められる視点を導き出すことである。

このカテゴリーは、《保健師の役割や専門性の自覚》、《看護専門職者としての視点への気づき》の2つのサブカテゴリーで構成されている。

《保健師の役割や専門性の自覚》は、以下のコードに代表された。

「保健師として人々が生きがいや楽しみを見つけてことができるように活動していくことが必要である」

「保健師は、手助けするよりも、その人のできることや地域の特性をじっくり見て、捉えて適切なサポートをすることが大切だと学んだ」

「保健師は住民の思いを拾い、組織へ反映していくことが重要であると考えた」

「保健師は何かしてあげようと思うよりも、人と人をつなぐ、強みを生かすなど、裏方としての役割がメインになると分かった」

《看護専門職者としての視点への気づき》は、

以下のコードに代表された。

「地区踏査によって、日常で見ているものと医療職者として見る目が違うことを実感した」

10) 自己の課題への気づきと体験からの成長

【自己の課題への気づきと体験からの成長】とは、フィールドワークの体験を通して、学生自身が自身の持つ課題や強みに気づき、課題の克服に努力したり、自身の弱さや強さに向き合うことで、看護専門職者として育っていくことである。

このカテゴリーは、《自分の強みに目を向ける大切さへの気づき》、《他者の体験から自己の学びを広げる力の習得》、《ことばの背景を捉える必要性の認識》、《適切な目標設定の必要性の実感》、《コミュニケーション能力や判断力の課題への気づき》の5つのサブカテゴリーで構成されている。

《自分の強みに目を向ける大切さへの気づき》は、以下のコードに代表された。

「グループワークで自分の苦手なところを変えるよりも得意なことやできることに目を向けることが大事だと学んだ」

「グループでの作業から、自分の苦手なところをあまり意識しすぎないことが重要だと学んだ」

《他者の体験から自己の学びを広げる力の習得》は、以下のコードに代表された。

「住民の話や地区踏査で得られた情報を元にグループで対策を考えることができた」

「同じ町を歩いたグループでも感じたことや発見は違っており、共有し他の視点を取り入れることが大切であると学んだ」

《ことばの背景を捉える必要性の認識》は、以下のコードに代表された。

「住民の言葉をそのまま受け止めるのではなく、なぜそう思っているのか、本当にそう思っているのか、背景には何があるのかという疑問を常に持つことが大切だと思った」

《適切な目標設定の必要性の実感》は、以下のコードに代表された。

「住民との会話に関すること以外に事前に目標設定をしていたら良かった」

「多面的に地域を捉えるという目標では、いろいろな側面から（地域を）捉えることはできた」

《コミュニケーション能力や判断力の課題への気づき》は、以下のコードに代表された。

「コミュニケーション力や一般知識が少ないことで会話が続き住民に気を使わせてしまった」

「自分の価値観だけで物事を判断してはいけないと思っていても、無意識にしていることに気がついた」

このように、中山間地域でのフィールドワークの経験を通して学生が得た学びとして、地域の中で住民主体の組織化活動の実際を体験することで、【地域の力と健康度を高める組織活動への理解】や【住民主体の活動の根底に住民のニーズがあることの理解】が深まっていた。また、住民の声にふれることにより、【住民がもつ力への信頼と協働の意識の強化】が図られ、【人々がつながりあって支え合う地域の強さの認識】や【生活の安心を形づくる地域のつながりの認識】が高まっていた。その中で、【地域への愛着の芽生え】と【人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感】が学生のところに沸き起こっていた。さらに、これらのフィールドワークでの学びを通して、【公衆衛生看護活動の専門性に基づいて考えを導き出す力の獲得】がなされ、このことによって、【看護専門職者としての自覚と意識の高まり】が起これ、フィールドワークのプログラムを通して、【自己の課題への気づきと体験からの成長】につながっていた。

3. 地域や生活の捉え方の変化（表3）

フィールドワークでの体験によって、学生のイメージ化が難しかった地域や生活について、その捉え方の変化を分析した。その結果、抽出された109のコードから、【生活の多様性への気づき】、【地域に対するイメージの変化】、【地域の概念の広がり】、【地域を診る視点の広がり】、【地域の本質に

表2 フィールドワークでの学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
地域の力と健康度を高める組織活動への理解	地区組織の役割に対する理解の深まり
	地区組織活動が地域の健康を底上げしていることへの気づき
	地域の力を強めるための組織活動への理解の深まり
住民主体の活動の根底に住民のニーズがあることの理解	住民を中心とした活動への理解の深まり
	住民の思いを知ることが活動の基盤となることへの気づき
	住民の生の声に耳を傾ける重要性の実感
住民がもつ力への信頼と協働の意識の強化	住みやすさを形づくる住民の力への確信
	住民と専門職者が協働する重要性の認識
人々がつながりあって支え合う地域の強さの認識	人とのつながりが地域にもたらす良い効果の受けとめ
	地域や人とのつながりで生きがいをもたらされることの理解の深まり
	グループや組織活動がもたらす生きがいの認識
	支援する側、される側でなくお互いが元気の源となることへの実感
生活の安心を形づくる地域のつながりの認識	ボランティア活動と日常生活のつながりへの視点の広がり
	生活の基盤となる「安心」の再認識
	地域や人とつながる居場所づくりへの期待
地域への愛着の芽生え	地域活動の根底にある地域への愛着に対する感銘
	住民の地域への思い入れに対する感動
	自分の地域や周囲の環境への関心の高まり
人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感	活動の継続を支える人々の熱い思いに対する敬意
	住民と関わることで実感した人のあたたかさへの感謝
	地域で活動する保健師のやりがいと魅力の発見
公衆衛生看護活動の専門性に基づいて考えを導き出す力の獲得	地域の課題解決の方向性の提案
	将来の地域の課題の予測に対する思考の広がり
	実際に行う支援活動の難しさの実感
	地域を知ることが活動の基盤となることの再認識
看護専門職者としての自覚と意識の高まり	保健師の役割や専門性の自覚
	看護専門職者としての視点への気づき
自己の課題への気づきと体験からの成長	自分の強みに目を向ける大切さへの気づき
	他者の体験から自己の学びを広げる力の習得
	ことばの背景を捉える必要性の認識
	適切な目標設定の必要性の実感
	コミュニケーション能力や判断力の課題への気づき

迫る力の獲得】、【地域を感性で捉える力の習得】、【個と地域の関連性と相互の必要性の理解】の7つのカテゴリーと18のサブカテゴリーが抽出された。その結果を表3に示す。

1) 生活の多様性への気づき

【生活の多様性への気づき】とは、中山間地域に足を踏み入れ、今までの自分の生活とは異なる暮らしを目の当たりにすることで、生活に対する

捉えが広がり、人々の生活の多様さを知ることの大切さを見出すことである。

このカテゴリーは、《多様な生活を知る必要性への気づき》と《生活の豊かさや満足度の概念の変化》の2つのサブカテゴリーで構成されている。

《多様な生活を知る必要性への気づき》は、以下のコードに代表された。

「いろんな地域に出向いていき、様々な生活を知ることによって柔軟な考えができる」

「自分の住んでいる町しか知らないことで、生活上の課題が分からないことも有り得ると考えた」

「様々な生活環境にある住民の生活上の課題を把握するためにはいろんな地域の生活を知ることが必要だと思った」

《生活の豊かさや満足度の概念の変化》は、以下のコードに代表された。

「フィールドワークを通して、生活はただ衣食住があって暮らすだけでなく、生きがいをもって自分らしく生きるためにあるものだと考えるようになった」

「生活の豊かさとは交通網や商業施設の便利さではなく、その人にとって住みやすいかどうかが重要だという考えが強まった」

「道路が整っていないくても、物がなくても自分のやりたいことを自分らしくすることが生活するという意味に含まれていると思った」

2) 地域に対するイメージの変化

【地域に対するイメージの変化】とは、今までの自分の生活圏域とは異なる地域にふれることで、フィールドワーク実施以前に予測していた地域の課題が、人のつながりによって補完されていることに気がつくことである。

このカテゴリーは、《不便さを補う地域の良さへの気づき》と《つながりが当たり前という発見》の2つのサブカテゴリーで構成されている。

《不便さを補う地域の良さへの気づき》は、以下のコードに代表された。

「山間部での生活は大変そうというイメージだったが、住民の方は地域にあるモノを利用して不便なく生活していることを知った」

「その地域を楽しみ、不便さをその地域の良さと捉えることで『不便』という概念がなくなるのだと思った」

「中山間地域は不便な生活をしているといったイメージが、不便さも地域の良さだと捉えられるようになった」

「不便なことは工夫して不便にならないようにするという住民の考えを聞き、なるほどと思った」

《つながりが当たり前という発見》は、以下のコードに代表された。

「自分が思う以上の住民同士の関わりがあって、それが当たり前なのだと実感した」

「地域のつながりは、昔にあったものというイメージだったが、実際に地域ではまだあることに驚いた」

3) 地域の概念の広がり

【地域の概念の広がり】とは、フィールドワーク実施前に学生が持っていた「場所」という地域の捉えから、地域とは様々な要素を含むものとして捉え直し、地域を構成する存在を意識することになることである。

このカテゴリーは、《場所としての地域の捉えからの転換》と《日常生活を支える存在の意識化》の2つのサブカテゴリーで構成されている。

《場所としての地域の捉えからの転換》は、以下のコードに代表された。

「地域とは人が住んでいる所という捉え方から、地域とは様々な資源や良さがあり、無限の可能性を作り出せるものという捉え方に変化した」

「生活をしている場という捉えから、地域とは、人と人が助け合いながら生活する中でQOLを向上することができる場であると考えた」

《日常生活を支える存在の意識化》は、以下の

コードに代表された。

「地域の課題解決のために人や物、資源を生かしながら地域という1つのコミュニティが成り立っていることを知った」

「日頃の生活が変わりなく当たり前で過ごせることは、暮らしの基盤がしっかりしている証拠であるとわかった」

4) 地域を診る視点の広がり

【地域を診る視点の広がり】とは、地域を捉える際には住民の視点に立ち、生活者の発達段階や経時的変化、地域の持つ強みなどを総合的に診ることが必要だと実感し、自分の枠組みだけで考えることの危険性に気づくことである。

このカテゴリーは、《住民の視点で地域を捉える必要性の理解》と《幅広い視点で地域を診る必要性の実感》、《地域の強みを生かす考え方への変化》、《自分の価値観だけで地域を捉える危険性への気づき》の4つのサブカテゴリーで構成されている。

《住民の視点で地域を捉える必要性の理解》は、以下のコードに代表された。

「住民の声に耳を傾け、同じ目線に立って生活を考えることが重要だと思った」

「実際に住んでいる人達の話聞くことや、思いを知ることが「地域を知る」ための一歩になることを学んだ」

「自分たちが不便ではないかと予測していたことが、住民にとっては日常であり、1日を過ごす中の楽しみの一つだと知り、自分の考えで判断するのではなく、住民の考えを理解する大切さを知った」

《幅広い視点で地域を診る必要性の実感》は、以下のコードに代表された。

「高齢者や母子など、幅広い住民の目線に立って、地域を診ることが大切だと考えるようになった」

「地域を年代や家族構成、環境の面から捉えるように変わってきた」

「住民が捉える地域とのギャップをなくすためには、地区踏査の中で時間や季節、見る人によっても捉え方が違うという事を理解しておくことも必要である」

《地域の強みを生かす考え方への変化》は、以下のコードに代表された。

「その地域にはどのような強みがあるのかを理解して地域という集団を捉え、保健活動を行っていかねばいけないと考えた」

「その地域の強みや特徴を生かすためには、どうしたらよいかを考えることができるようになった」

《自分の価値観だけで地域を捉える危険性への気づき》は、以下のコードに代表された。

「自分の価値観や考え方で判断することは危ないことだと気付いた」

「自分の主観だけで地域を捉えるのではなく、実際の暮らしを観て地域を捉えることが大切だと変化した」

「住民の話聞き、今まで自分が抱いていた価値観や生活に関する考え方が偏っていたことに気づいた」

「自分の物差しだけで住民のニーズや課題を考えると本当に必要なことと違ってしまう可能性がある」

「資料をもとに得た情報にとらわれていたが、地域の姿を捉えるためには、自分たちの決めつけで地域を判断してはいけないことを学んだ」

5) 地域の本質に迫る力の獲得

【地域の本質に迫る力の獲得】とは、地域をただ見るのではなく、生活の場である地域を構成しているものを捉えるために、住民の声に耳を傾け、自分の枠組みを超えて広く地域を捉えることができる力を身につけることである。

このカテゴリーは、《暮らすということを前提にして地域を捉える必要性の実感》と《地域の見えない部分を見ようとする大切さの実感》、《イメージと現実とのギャップを住民の声で埋める必要性の認識》、《自分の枠組みを超え

て地域の多様性を捉える力の獲得」の4つのサブカテゴリで構成されている。

《暮らすということを前提にして地域を捉える必要性の実感》は、以下のコードに代表された。

「地域特性やその地域で暮らすということを考えなければならないと考えた」

《地域の見えない部分を見ようとする事の大切さの実感》は、以下のコードに代表された。

「地域の表面だけを見るのではなく、見えない部分を捉えていくことが必要だと考えた」

「地域を見ようとして見ないと、見えてこないと感じた」

「無関心でいると地域は見えてこないと感じた」

《イメージと現実とのギャップを住民の声で埋める必要性の認識》は、以下のコードに代表された。

「自分たちの町に対する勝手なイメージと、住民の意見とでは大きくギャップがあることが分かった」

「地域を理解するためには、自分が感じた視点と住民が感じていることの視点の両方が大事であることを学んだ」

「地域への支援を考える時には住民の声と客観的に地域を評価し見極める支援者の視点の両方が必要だと考えるようになった」

《自分の枠組みを超えて地域の多様性を捉える力の獲得》は、以下のコードに代表された。

「ひと山越えたところの方もお隣さんだという表現は、自分たちの尺度だとわからない魅力や感覚だとわかった」

「地域の人と積極的に関わり、自分たちが考える枠組みにとらわれず、住民の価値観を知り、思いを受け止めて視野を広げることができた」

6) 地域を感性で捉える力の習得

【地域を感性で捉える力の習得】とは、地区踏査の経験を通して、住民の生活の場である地域に足を運び、自らの目で見えて声を聴いて、においを感じ、ふれてみるといった感覚を最大限に活用し

て、身体全体で地域を感じることができる力を身につけることである。

このカテゴリは、《地域に出向き自分の目で確かめる重要性の実感》と《五感を活用して地域を肌で感じる体験からの成果》の2つのサブカテゴリで構成されている。

《地域に出向き自分の目で確かめる重要性の実感》は、以下のコードに代表された。

「自分の目で、地域で暮らす人々の生活を含めて地域を知ることが重要だと思った」

「自らの足で歩き、地区を自分の目で見ることによって、本当に必要なことが把握できると思った」

「地域のチカラをより引き出していくために実際に地域に出向き地域の強みを見つけていく必要がある」

「今までは、物事を判断する時は数値的なデータや、自分の価値観で判断していたが、実際に自分が感じ、生の声を聞くことで本当に問題になっていることは何かを明らかにすることができることを学んだ」

《五感を活用して地域を肌で感じる体験からの成果》は、以下のコードに代表された。

「五感を使って地区踏査をすることで、住む住民にとってどのような地域か想像できた」

「同じB町でも空気や音、におい、風景は全く違うことを知った」

「地域は、自分たちの想像だけで判断するのではなく、実際に聞く、見る、におう、触るなどの五感を活用して地域を考えることが大切だと学んだ」

7) 個と地域の関連性と相互の必要性の理解

【個と地域の関連性と相互の必要性の理解】とは、地域を捉えるには、個人の生活を丁寧に見る視点とともに、広く地域全体を見る視点が不可欠であり、双方の視点をつなぎ合わせることで地域を捉えることにつながると理解することである。

このカテゴリは、《個人とともに地域全体を

捉える必要性の実感」と《地域の中の個別を捉える必要性の理解》の2つのサブカテゴリーで構成されている。

《個人とともに地域全体を捉える必要性の実感》は、以下のコードに代表された。

「一定の対象のみの問題だけではなく、地域全体の課題として解決に取り組んでいくことが必要である」

「個人の生活だけでなく、地域全体を捉えて、良い方向に向かえる支援方法を考えることが大切だと思った」

《地域の中の個別を捉える必要性の理解》は、以下のコードに代表された。

「個人の思いを聞き、その思いを全体として診る必要性があると感じた」

「自分の価値観で地域を捉えると、誤った方向で公衆衛生看護活動を繰り返してしまうため、全体を見るだけでなく、個人を見ることも必要だと

思った」

このように、中山間地域におけるフィールドワークの経験から学生には、人々の生活の場である地域で住民と直接関わることにより、【生活の多様性への気づき】が生まれていたことが分かった。また、個々の生活にふれることでフィールドワークの実施前と比較して、【地域に対するイメージの変化】につながり、【地域の概念の広がり】や【地域を診る視点の広がり】によって、生活や地域の捉え方が変化していた。さらに、地域に出て、先入観を持たずに身体全体で地域を感じることで、【地域を感性で捉える力(の)習得】し、得た情報から地域を捉える思考過程の中で、【地域の本質に迫る力の獲得】につながっていた。そして、これらの変化を通して、【個と地域の関連性と相互の必要性の理解】が深まり、地域や生活を捉える視点が大きく変化していた。

表3 地域や生活の捉え方の変化

カテゴリー	サブカテゴリー
生活の多様性への気づき	多様な生活を知る必要性への気づき
	生活の豊かさや満足度の概念の変化
地域に対するイメージの変化	不便さを補う地域の良さへの気づき
	つながりが当たり前という発見
地域の概念の広がり	場所としての地域の捉えからの転換
	日常生活を支える存在の意識化
地域を診る視点の広がり	住民の視点で地域を捉える必要性の理解
	幅広い視点で地域を診る必要性の実感
	地域の強みを生かす考え方への変化
	自分の価値観だけで地域を捉える危険性への気づき
地域の本質に迫る力の獲得	暮らすということを前提にして地域を捉える必要性の実感
	地域の見えない部分を見ようとするものの大切さの実感
	イメージと現実とのギャップを住民の声で埋める必要性の認識
	自分の枠組みを超えて地域の多様性を捉える力の獲得
地域を感性で捉える力の習得	地域に出向き自分の目で確かめる重要性の実感
	五感を活用して地域を肌で感じる体験からの成果
個と地域の関連性と相互の必要性の理解	個人とともに地域全体を捉える必要性の実感
	地域の中の個別を捉える必要性の理解

考 察

1. 体験から生み出される生活から地域を捉える視点の広がり

現在の市街地は電車やバスが数十分ごとに走り、空腹を感じれば24時間営業のコンビニエンスストアに行くことで、欲しい物はほとんど手に入れることが可能な時代である。そのような生活に慣れている学生は、物的資源が少ないことが生活をするうえでの不便さであると考えがちである。しかし、実際に中山間地域で生活している人々の話を聞くことで、本当の豊かさとは物的資源だけではないという気づきが得られたと考える。つまり、その人にとって、その地域が住みやすいかどうかを考えていく必要があるという《生活の豊かさや満足度の概念の変化》が、学生の中に生まれたと考える。川島は「人間が単に生命を維持するだけでなく、人間らしく豊かに生きたいという欲求をもち、それを実現しかつ持続することにより、内面的な充実感を持って生きていくことができる。この過程の総称が『生活』である¹¹⁾」と述べている。このように、衣食住が整っていることや便利さだけではなく、人々が自分らしく生きがいをもって生きることが豊かさであるという【生活の多様性への気づき】が学生の中に芽生えたと考える。

フィールドワーク実施前の学生は、地域を「人が住んでいる所」や「生活する『場』」として捉えていた。これは、松尾ら¹²⁾のいう、現代の学生が地域社会の中で生活者としての生活経験に乏しく、地域や生活を捉える視点を十分にもっていない状況であることが関係しているのではないだろうか。しかし、実施後の学生は、地域にはその地域の良さや生活を支える資源があり、無限の可能性を作り出せるものが地域であるという捉え方に変化していた。このようにフィールドワークによって、生活体験の乏しさを補うことができたことで《場所としての地域の捉えからの転換》が図られ、【地域の概念の広がり】につながったと考える。さらに、学生の地域を捉える視点は、《自分の価値観だけで地域を捉える危険性への気づき

》へと変化していた。山本¹³⁾が「地域診断について「住民の住んでいる世界を知る、生きている文脈を理解する」ことの重要性を述べているように、自分の物差しや価値観だけで偏った捉え方にならないように、実際の地域を見て、人々のニーズや課題を考えていく必要があるという【地域を診る視点の広がり】へと変化していったと考える。

また、学生は《地域の見えない部分を見ようとする事の大切さを（の）実感》していた。村田ら¹⁴⁾は、多くの保健師が常に地域の様々な情報に対して敏感であることや、普通であれば見落とされてしまうような地域環境を把握することが保健師には習慣化・身体化されていると述べている。このように、フィールドワークでの経験は、目に見えるものだけではなく、見えないものを見て、考えるといった【地域の本質に迫る力の獲得】につながったのではないだろうか。これらのことから、実際に地域へ出向き住民とふれ合うことで、地域を診る視点が広がり、地域や生活の捉え方に変化をもたらすものと示唆された。

2. 住民の声からはじまる地域づくり

学生の学びの内容を検討してみると、学生が自ら地域に出向き、地域住民の生活にふれることで中山間地域の特徴をつかみ、地域の人々の生活を捉える経験ができたと考える。平成25年3月に公表された地域における保健師の保健活動に関する検討会報告書¹⁵⁾では、保健師の活動の本質は地域を「みる」「つなぐ」「動かす」ことであるとしている。学生は、フィールドワークを通してこの本質について学びを得ることができていた。

地区踏査での住民へのインタビューにおいて学生は、その人の生活に耳を傾けることの難しさを感じていた。しかし、その中で、実際に地域に出向き住民の声を聴くことは、住民の視点で地域を捉えるために必要不可欠であることを学んでいた。そして、数値データから見る地域だけでなく、住民から直接収集した情報の重要性、その個別的情報からニーズの共通点を見つけ、地域を総合的に捉える視点の重要性についても学ぶことがで

きていた。さらに、地域の特色をつかみ、地域を診ることで、住民の生活にふれ、住民が地域で役割分担をしながら助け合っている状況を感じ、地域の中で健康や生きがい、安心、生活の豊かさ、資源の継続活用が住民の力によってつくりだされていることを学ぶことができていた。これらの学びは、地域に出向き、地域や住民とのふれ合いの中で見たり聞いたりすることで得られた学びである。

菅原らは、「地区踏査や住民インタビューによって当該地域に特徴があると、学生が実感したことが、地域看護診断の必要性の理解につながっている¹⁶⁾」と述べている。今回のフィールドワークにおいても、学生自身が地域を診て、住民からの声を聴くことで地域を捉えて、地域診断を行う必要性の理解につながったと考える。

住民の声に耳を傾けることの大切さについては、学生がフィールドワーク前に思い描いていた地域や生活のイメージと、実際に見た地域や生活との間の差に気づいたことで、認識できたと考える。このことから、学生は地域に出向くことで、生活の多様性と、地域組織活動や住民のもつ力を知り、そしてその中で、地域の力を信じ住民とともに協働して、地域づくりを展開していくことの重要性に気づくことができたと考ええる。

3. 学生のところに芽生える地域への愛着

本研究の結果、学生は、中山間地域に暮らす人々の生活と温かさにもふれることで、【人々がつながりあって支え合う地域の強さの認識】をすることができ、そこから自分の暮らす地域を想起することによって、自らの【地域への愛着の芽生え】につながっていた。さらに、フィールドワークでの体験から【人々とふれ合う楽しさと地域保健活動の面白さの実感】を得ていることが明らかになった。このことから、学生は中山間地域において地域住民のつながりの強さやソーシャルキャピタルの実際を目の当たりにすることで、個々の活動が地域全体の強みにつながるといった、個から地域に視野を広げて考えを導き出すことができていた

のではないかと考える。石川らは「講義を聴くだけでなく、フィールドワークや災害図上訓練を取り入れ、体験型の授業科目として設定したことが災害看護活動のイメージ化に有効であった⁸⁾」と述べている。本研究の結果からも講義だけではイメージ化の難しい公衆衛生看護活動における個と地域を捉える視点を養うことに効果があったことが確認できた。

また、地域社会の関係性が希薄化していく中で、学生自身も自分の住む地域の人々とふれ合う機会や体験が少なく、周辺地域に関心を向けることが日常生活の中ではあまりない現状にある。しかし、本研究の結果からフィールドワークによって〈自分の地域や周囲の環境への関心の高まり〉がみられたことから、フィールドワークでの学びが現地にとどまらず、学生の暮らす地域の周辺の人々へも関心が広がっていることが分かった。これは、中山間地域という人的物的資源の少ない状況の中で人々が支え合って生活を営んでいることや、そこに住む人々の地域への深い愛情と思い入れを住民の生の声から体感することで、学生のこころが動かされた体験が大きかったのではないかと考える。このように、地区踏査等での住民とつながる体験を通して、漠然として捉えにくかった人々の生活や地域の概念が広がっていく過程の中で、地域や人々の持つ力への気づきが生まれ、さらには学生自身の日常生活の質や人の和の広がりにも影響を与える可能性が考えられた。

現代社会は情報伝達機器が発達していく中で、学生自身が活用するコミュニケーション手段も多様化し、直接会って話すよりもSNSなどが多く活用されている。その中で道行く人に自ら話しかけ、思いを聴き、そして相手から温かく受け入れてもらえたフィールドワークでの経験は、人と人のつながりをつくる保健師活動を学習する学生にとって、非常に貴重な学びとなったのではないだろうか。このような人とつながることで得られた学びを通して学生は、〈地域で活動する保健師のやりがいと魅力を（の）発見〉していた。地域活動のやりがいや面白さを学生自身が感じるために

は、フィールドワークのように地域に出向き、実際に住民と関わる体験が最も有効ではないかと考えられた。そして、清水らは「地区踏査や地域住民へのインタビューは、地域の理解や地域をみる視点を養うだけでなく、地域を知るという過程を通して地域への興味・関心が引き出され、それが学習意欲をもたらし、ひいては学習成果にもつながるものと思われる¹⁷⁾」と述べている。本研究の結果もふまえ、フィールドワークで芽生えた地域への関心が、今後の公衆衛生看護の活動を考えるにあたって基礎的な土台となるとともに、保健師としての支援のあり方の思考過程を深めることにつながるのではないかと示唆された。

4. 保健師教育におけるフィールドワーク実施の意義

今回のフィールドワークにより、学生は公衆衛生看護活動の専門性に基づいて考えを導き出す力を獲得し、地域の課題や強みを把握し、公衆衛生看護の視点に基づいた課題解決の方法の提案や実施の可能性を考えることができるようになっていた。そして、保健師の役割や専門性について考え、看護専門職者としての自覚と意識の高まりがみられた。

保健師の役割や専門性については、現任の保健師も葛藤することがある¹⁸⁾とされており、学生が講義で理解し、具体的なイメージを持つことは困難であると考えられる。このことについては、前田らが「一住民としても保健師と関わる機会の少ない年代である学生にとって、実習前に保健師による保健活動の実際を想像するのは困難である¹⁹⁾」と述べ、綾部らも「学生は、保健師教育課程の入口で最も基本的な保健師や保健師活動のイメージ作りが難しい。保健師のイメージづくりは難易度の高い教育内容である²⁰⁾」としている。しかし、今回のフィールドワークで学生は、実際に行う支援活動の難しさを実感すると共に、地域の課題解決について、住民の声と地域の実態に基づいて考える必要性を理解することができた。このようにフィールドワークで五感を使って地域を診る視点

と感性を磨き、住民の声から始まる地域づくりについて考えたことは、保健師の専門性の理解を促し、保健師活動の理念や価値観のイメージ化につながったと考える。また、公衆衛生看護学実習前にフィールドワークで地域を診る視点や、保健師の専門性について理解しておくことは、実習に臨む意欲や積極的な姿勢につながる効果があると考えられる。

結 論

本研究の結果、フィールドワークにおける学生の学びと地域や生活の捉え方の変化について、以下の結論が得られた。

1. フィールドワークによって、地域を診る視点が広がり、地域や生活の捉え方に変化がもたらされたと考える。
2. 学生は、地域に出向くことで、生活の多様性と住民のもつ力を知り、住民とともに協働して、地域づくりを展開していくことが重要であると気づいたと考える。
3. フィールドワークは、講義だけではイメージ化の難しい公衆衛生看護活動における個と地域を捉える視点を養うことに効果があったと考える。
4. フィールドワークでの経験が、学生自身の日常生活の質や人の和の広がりにも影響を与える可能性が考えられた。
5. フィールドワークを通して、保健師の役割や専門性について考え、専門職者としての自覚と意識の高まりがみられた。

研究の限界と今後の課題

本研究によって、学生の学びから、フィールドワークの有効性を明らかにすることができた。しかし、評価については、客観的な修得度を測定できないことに本研究の限界がある。また、学びの内容はフィールドワークの実施直後のデータであるため、今回の学びが卒業時まで持続できているかどうかについては明らかにできていない。今後は、本取り組みの3年間の成果と研究結果から、

本専攻のカリキュラムにおける他の講義や演習、実習との関連を明らかにし、それぞれの科目での教授内容を検討することが課題である。

謝 辞

フィールドワークの実施にあたり、多大なご協力をいただきましたB町社会福祉協議会の皆様方、そしてB町役場や地域住民の皆様方に心より感謝申し上げます。

また、本研究に快くご協力くださいましたA短期大学専攻科の学生の皆様方に感謝いたします。

引用文献

- 1) 大須賀恵子：看護大学生の地区診断技術を高める教育方法の検討 地区踏査・マッピングの導入, *保健師ジャーナル*, **2006**, 62巻(10), 876-881.
- 2) 厚生労働省：平成23年看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, **2011**, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y-att/2r985200000131bh.pdf> (アクセス日2017年10月30日)
- 3) 李慧瑛, 深田あきみ, 新橋澄子ほか：臨地実習における看護学生の内省傾向—ポートフォリオ導入後の成長報告書の内容分析から—, *看護科学研究*, **2016**, vol.14, 20-31.
- 4) 有本梓, 田高悦子, 大河内彩子他：看護基礎教育課程における地域看護診断演習プログラムの評価, *横浜看護学雑誌*, **2017**, Vol.10(1), 20-28.
- 5) 岩本沙織, 小倉弥生, 茅本善子他：コミュニティ・アズパートナーモデルを用いた地域看護診断の学習効果～演習後の学年比較, 実習前後比較から～, *神戸市看護大学紀要*, **2009**, Vol.13, 49-56.
- 6) 野原真理, 照沼美代子, 若林千津子他：本学における地域看護学の授業展開—地域診断の授業方法の評価—, *医療保健学研究*, **2011**, 2号, 87-106.
- 7) 清水美代子, 永井道子, 渡邊節子：保健師教育課程における地域診断演習方法を考える, *日本赤十字豊田看護大学紀要*, **2014**, 9(1), 81-88.
- 8) 石川麻衣, 山田洋子, 武藤紀子他：学士過程自由選択科目における災害地域看護教育方法の検討, *千葉大学看護学部紀要*, **2006**, 第28号, 51-58.
- 9) 清水美代子, 永井道子：フィールドワークを取り入れた地域診断演習における学生の学び, *日本赤十字豊田看護大学紀要*, **2015**, 10(1), 123-134.
- 10) 厚生労働省：地域における保健師の保健活動に関する指針, **2013**, <http://www.nacphn.jp/topics/pdf>. (アクセス日2017年10月30日)
- 11) 川島みどり：意識的な条件づけが過去の生活習慣や生活の記憶を再生した例から, *日本看護科学会誌*, **1985**, 5(2), 12-15.
- 12) 松尾和枝, 酒井康江, 蒲池千草他：地区診断を用いた地域看護学演習の取り組みと今後の課題, *日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report*, **2005**, 4巻, 171-182.
- 13) 山本真由子：「看護師が行う地域看護活動」の視点から見た必要な教育内容, 特集 地域看護学と公衆衛生看護学 Part 1 看護学生が学ぶ地域看護学再考, *看護教育*, **2012**, 53(5), 370-375.
- 14) 村田陽平, 埴淵知哉：保健師による地域診断の現状と課題—「健康の地理学」に向けて—, *E-journal geo*, **2011**, 5(2), 154-170.
- 15) 藤内修二：地域を「みる」「つなぐ」「動かす」保健師への期待 公衆衛生医の視点から, *地域保健*, **2017**, 48巻3号, 26-29.
- 16) 菅原京子, 後藤順子, 渡會睦子他：地域看護診断を主要な目標とする実習の成果と課題, *山形保健医療研究*, **2005**, 第8号, 41-51.
- 17) 清水美代子, 永井道子：フィールドワークを取り入れた地域診断演習における学生の学び, *日本赤十字豊田看護大学紀要*, **2015**, 10巻1号, 123-134.

- 18) 頭川典子, 安田貴恵子, 御子柴裕子他: 学士課程卒業後の保健師が新任期に感じる困難と対処状況, *長野県看護大学紀要*, **2003**, 5巻, 31-40.
- 19) 前田則子, 徳永龍子: 保健所・市町村実習における実習前演習による実習イメージ化と自信獲得, *鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要*, **2011**, 15, 43-48.
- 20) 綾部明江, 富岡実穂, 木下由美子: 保健師志望学生が望む保健師教育のあり方ー A 大学4年生の意見を通してー, *茨城県立医療大学紀要*, **2012**, 17, 51-58.
- 受付日: 平成29年11月21日
受理日: 平成29年12月25日

Original Paper

Results of Field Work in the Inter-Mountainous Area(1st Report)

Akiko OONISHI^{1*}, Yuko TAKATO¹, Miki NOMURA¹, Yui SAKAMOTO¹,
and Misako MORIMOTO²

Abstract: The purpose of this study is to clarify the contents of the students' learning and changes in their understanding of a region and its life through field work. The target is 18 students of the A junior college. The codes were extracted from their reports and were analyzed qualitatively and inductively. As a result, as to learning outcomes, ten categories such as [Strengthening trust in residents and collaboration with them], [The development of the attachment to the area], [Feeling of fun to interact with people and interest in community health activities], and [Increasing awareness and consciousness as nursing professionals] have been extracted. As to changes in their understanding of the region and its life, seven categories such as [Awareness in the diversity of life], [Expansion of regional concepts], and [Acquisition of power to approach the essentials of the region] have been extracted. From these, it can be concluded that the students' experience in the field work helped them to acquire the ability to think from the perspective of the public health nursing profession, spreading their understanding of the region and its life and the importance of assisting community-based activities.

Key words: field work, learning, public health nursing, public health nurse education, community

^{1*} Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing, Email: aoonishi@kochi-gc.ac.jp

² Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing, Part-time lecturer